EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友 EDO-TOMO

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

No.63
2011
（平成23年）
9 ― 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

『二人の貴婦人』はじめ、多くが日本初公開……1
友の会セミナー「大正時代の大相撲 大正100年に寄せて」‥2
友の会セミナー「江戸は一日にしてならず」……3
特別観覧会「東京の交通100年博」……4
江戸博クリップ「外で思ったこと」……4
見学会「再訪　江戸四宿を歩く―千住宿」……5
第3回「えど友研究発表会」……6
えど友サークルだより / 会議・会合日誌……7
えど友プラザ「王子の狐の行列」の写真……8
伊豆に生きる江戸の文化……8
色っぽくない色の話……9
工場をたずねる……9
落語で江戸散歩…㉒［首提灯］……10
催事案内 / 会員優待のお知らせ……11～12

『二人の貴婦人』はじめ、多くが日本初公開

～特別展「世界遺産 ヴェネツィア展」担当の粟屋朋子学芸員が語る～

「魅惑の芸術－千年の都 世界遺産ヴェネツィア展」が、9月23日(金・祝）から開催されることになりました。

697年に共和国として生まれたヴェネツィアは、16世紀ルネサンス期には爛熟期を迎え、ナポレオンの侵攻にあうまでの約1,000年間に、建国・絶頂・終焉という数奇な運命をたどった都市です。外敵に対し、最良の防御設備にもなるラグーナ（潟）を生かし、強大な海軍力と交易による富を背景に、ほかに類を見ない都市をつくり上げます。また、その美しさから“アドリア海の女王”とたたえられ、世界中の芸術家や富裕層たちに愛されてきたのです。

規模や時代こそ違いますが、江戸時代、当館のそばを流れている隅田川は、水上交通の大動脈であるだけでなく、舟遊びなど、さまざまな文化を生み出しました。「都市史」という観点からも、水の都・ヴェネツィアで育まれた歴史と芸術をお楽しみいただけるのではないかと思います。

この展覧会では、ヴェネツィアの魅力を、「黄金期」「華麗なる貴族」「美の殿堂」と3つの章立てで紹介します。

ヴェネツィアの絵画の展覧会は、今までにも開催されてきましたが、歴史的な要素を加えて多角的にみせるのは本展が初めてかと思います。作品はコッレール美術館やドゥカーレ宮殿などから約140件を借用できることになりました。しかも、これらのほとんどが日本初公開です。

▲ヴィットーレ・カルパッチョ《二人の貴婦人》1490―95年頃　テンペラ・油彩、板　94.5×63.5cm　コッレール美術館

ジョヴァンニ・ベッリーニの「聖母子」やティントレットの「天国」など、ヴェネツィア派を代表する絵画だけでなく、宮殿や貴族の生活を彩った工芸・服飾品も展示されます。

そして、19世紀イギリスの批評家・歴史家のジョン・ラスキンが「世界で最も美しい板絵」とたたえた、ヴィットーレ・カルパッチョの「二人の貴婦人」(写真）が東京展限定で特別出品されます。

20世紀中ごろ、この作品の上部をなす作品「潟（ラグーナ）での狩猟」が見つかりました。この発見によって、謎に包まれていた「二人の貴婦人」を読み解くヒントが見えてきたのです。

当初、二人は高級娼婦であると解釈されてきました。しかし、男たちが狩猟をしている上部の絵の出現によって、狩猟に出ている夫を待っているのではという説明付けが可能になりました。この絵に描かれた動物は偶然配されているわけではありません。犬は忠実さ、キジバトは結婚や夫婦の絆、メスのクジャクは多産の寓意であることから、本作は夫婦の部屋に飾られていたと思われます。また、この作品は戸棚の両開き扉のうちの片方で、もう一方が存在すると考えられていますので、本展では展示に工夫をしています。どうぞ会場でご覧ください。残りの絵が発見されたとき、真の意味が理解されるのでしょう。まさに想像力をかき立てられる、ミステリアスな芸術作品といえます。

文化的な成熟度が高いヴェネツィアの新たな魅力をぜひ、ご堪能ください。

【聞き手】文：広報部会・平林美幸

第106回　江戸東京博物館友の会セミナー（2011/6/25）

「大正時代の大相撲　大正100年に寄せて」

講師　水野尚文さん（『ＮＨＫ大相撲中継』元編集長）

大正という時代

昭和42(1967)年が明治100年にあたり、中村草田男の俳句「降る雪や明治は遠くなりにけり」の感慨を深くしたものですが、大正は15年までなので、早くも平成23年が大正100年になりました。昨年は大正生まれの元関取では、こま犬のような仕切りで土俵を荒れ回った鳴門海、力道山の前座などで早くからプロレスで活躍した駿河海が亡くなりました。今は関脇羽島山、宮城海、一錦のみとなり、「大正は遠くなりにけり」の感慨ひとしおの思いがあります。

大正時代に入ると憲政擁護、藩閥勢力打倒を標榜した第一次護憲運動が起こり、民衆の声をバックに政党勢力が増大、大正7(1918)年には立憲政友会の原敬を首班とする政党内閣が成立しました。論壇でも吉野作造が民本主義を唱え、美濃部達吉の「天皇機関説」は議会政治発達の有力な主張となり、民主主義的風潮が広まりました。デモクラシーの風潮は白樺派の作家たちによる人道主義、理想主義など、文化全体にも強い影響を及ぼしました。一方経済面でも第一次世界大戦により、日本製品の輸出が増大し、資本主義は著しい発展を見せ、日本の経済界は好況を迎えました。また大学教育の普及と科学の発達により、インテリゲンチャが形成され、サラリーマンが増加、民衆の生活の近代化、向上が促進されました。対外的にはアジアでの権益拡大やソビエト新政権への干渉などもありましたが、国内的には民衆の意識が高まり、自由な雰囲気に包まれ、明治期と比べ自由主義、個人主義思想が一般化し、大正初期は明るい時代だったと言えましょう。

しかし、大正7年の米騒動に始まり、労働運動や社会運動が急速に高まり、さらに大正12(1923)年の関東大震災による経済的なダメージがあり、民衆の要求の高まりによる普通選挙が施行される一方、治安維持法による社会主義運動の弾圧、軍部の政治への関与強化など、昭和の暗い時代へと突入します。つまり大正前期の「明」、後期の「暗」はそのまま相撲界にも反映されます。

大正前期の大相撲

明治42(1909)年6月大相撲の殿堂国技館が開館し、梅ケ谷と常陸山による梅常陸時代は大いに大相撲人気を盛り上げましたが、大正時代に入ると太刀山、駒ヶ嶽が後を引き継ぎました。しかし駒ヶ嶽の没落は早く、その後は太刀山の一人天下となります。彼は猛突っ張りで43連勝の後、1つの黒星を挿んで56連勝するなど、驚異的な記録を残しました。明治末に大阪相撲「大木戸」の横綱免許問題で東西相撲協会は一時絶縁しましたが、大正2(1913)年に問題が解決、国技館で東西合併相撲が催され、大変な人気を呼びました。

常陸山に続いて梅ケ谷も引退、無敵太刀山（友綱部屋）に対し、常陸山の出羽海門下から大錦、栃木山が躍進、相次いで横綱に昇進しました。大相撲は東西制で、明治42年の旧両国国技館の開館以後、東西の勝数で団体優勝を決定し、優勝旗を授与していました。大正中期には出羽海部屋が隆盛のため西方は全員出羽海勢になりました。また大錦、栃木山、常ノ花により10連覇を果たすに至りました。

苦難が続く相撲界と東西合併

大正6(1917)年、菊人形の出火から国技館が全焼、再建工事中には大鉄傘を支える支柱が倒れ、再建までに2年を要しました。その間本場所は靖国神社相撲場での野天興行となりました。

大正11(1922)年6月元常陸山の出羽海取締の死去に続き、翌年1月には時代の風潮の反映もあり、力士の待遇改善を要求して「三河島事件」が勃発（ぼっぱつ）、その解決手打ち式の折、横綱大錦が突如廃業、同年9月の関東大震災では再び国技館が炎上し、翌13(1924)年春場所(1月)は東京を離れて名古屋で開催されるなど相撲人気の低迷に拍車がかかりました。

一方、人気実力とも東京に比べて劣っていた大阪相撲でも紛争が起き，大半の力士が去って衰退著しく、東西合併で危機を乗り切ろうという動きが起こりました。

大正14(1925)年、東京角力協会は、台覧相撲を催し、その際の摂政宮（皇太子時代の昭和天皇）からの御下賜金で摂政盃を作成し、これを機に東西(東京と大阪）合併の機運が一気に高まり同年12月にそれまで別々に運営されていた東西の角力協会が合併して財団法人大日本相撲協会が結成され、昭和2(1927)年1月に正式にスタートしました。

大正はたった15年間ですが、時代の激動と同様、「大正時代の相撲」を語るのは簡単なことではありません。ルールも現在とは違います。双葉山の69連勝と太刀山の43連勝1敗56連勝ではどちらが強いことになるのか。例えば休場は現在黒星と同じに勘定されますが、当時は一方が休めば相手も休場となり、ノーカウントでした。また、当時は引き分け預かりも多くありました。太刀山の成績には休みが幾つかあります。

東西合併の時、大阪相撲は東京相撲よりも著しく劣り、合同番付編成のため、3回実力審査の場所が開かれました。

【記録】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

第107回 江戸東京博物館友の会セミナー（2011／7／23）

「江戸は一日にしてならず」

講師　谷口　榮さん（葛飾区郷土と天文の博物館・学芸員）

はじめに

私は東京下町の歴史を調査研究している立場から、「江戸」という地域の歴史は徳川家康の入部から始まったのではないということを機会あるごとに強調しています。

「江戸」という地域の歴史は、平安時代には江戸氏が本拠とし、戦国時代には、江戸城を築いたとされる扇谷上杉氏の家宰太田道灌が活躍したということは語られますが、「江戸」の所在する東京下町を古代から通史的に取り上げて説明することは少ないようです。

今回は、家康入部前の戦国時代、さらに古代までさかのぼって、交通という視点から東京下町の歴史を概観し、近世都市江戸に覆い隠された家康以前の歴史について紹介します。

東京低地と下町のイメージ

隅田川を江戸市中と郊外の境ととらえる向きがあります。しかし、江戸時代の初めの頃と終わり頃では、江戸の下町の範囲も拡大し、変化しています。江戸時代の後半には、隅田川の東を流れる中川辺りまで、御府内の範囲に入っています（「江戸朱引絵図」）。近代・現代では、さらに東側は荒川放水路を越え、例えば、葛飾・柴又が下町ととらえられているように、現在では隅田川から江戸川にかけての低地帯を東京の下町の範囲としてとらえる場合が多く、歴史的な下町の範囲とはズレが生じています。そこで、「東京低地」という地理学の用語を借りて、この地域の歴史研究を進めているのです。

また、この東京低地は、家康の江戸入部により開かれ、それ以前は「海」で、「洪水の頻発地域だった」ので人の住みにくい、歴史的にも新しい土地というイメージが流布しています。本当にそのとおりなのでしょうか。この地域の歴史を考える時、「水の道」を含めた「交通」というキーワードを加えることで、従来の歴史像とは異なる世界が見えてくるのです。

葛西城争奪戦

まず、家康江戸入部以前の話題として、葛西城（葛飾区青戸）を取り上げます。16世紀になると、相模から台頭してきた小田原北条氏が関東に攻め入り、北条氏綱が大永4(1524)年に江戸城を攻略、天文7(1538)年には葛西城を奪取します。そして、同年、北条方が第一次国府台合戦で小弓公方足利義明を滅ぼします。

従来、葛西城は、その後も勃発（ぼっぱつ）した第二次国府台合戦も含め、合戦のために築かれた城であるといわれていました。しかし、築城は、それ以前の享徳の大乱［享徳3(1454)年］が勃発した頃にさかのぼり、山内上杉氏に臨海部の拠点のひとつとして築かれ、家臣の大石石見守が入ったのがはじまりです。

葛西城はそれだけではなく、最近の研究で東国の戦国史のなかで重要な位置を占めていることが判明しました。天文20(1551)年頃から永禄元(1558)年まで古河公方義氏が御座していたのです。つまり、関東の将軍古河公方の御所として機能していたのです。また、葛西城をめぐる幾多の攻防も、この葛西城の築かれている東京低地が、東国にあっていかに重要な地域であったかを物語ってくれています。

古代の東海道

さて、そのような戦国時代の要地として東京低地が位置付けられるには、それなりの背景があります。

そのポイントは、南北に流れる河川を使った水上交通とともに、河川を横断するように東西に幹線道路が貫いていることです。つまり、東京低地は水上と陸上交通の交わる交通の要衝といえるところなのです。

例えば、東海道というと日本橋を起点に京都までの街道と思いがちですが、それは江戸時代の姿で、実は宝亀2(771)年から古代の東海道が東京の下町、東京低地を横断していたのです。

そして、古代の東海道の渡河地点として、『伊勢物語』や『更級日記』に登場する「すみだの渡し」があったのです。『伊勢物語』では、「すみだの渡し」は物寂しい場所のように書かれていますが、それは文学的な筆使いであって、当時の史料などから渡河地点は繁華な場所であったことを知り得ます。

中世になると、古代東海道は鎌倉へ連絡する鎌倉街道として存続していました。ここでは、古代・中世を通じて幹線道路が東京低地を横断していたことを強調しておきたいと思います。

おわりに

東京低地には、亀戸、奥戸、青戸、江戸、今戸、花川戸など「戸」のつく地名が河川沿いに多く残っていますが、これはこの地域の「交通」の歴史を考える上でとても重要です。「戸」は元々「津」を意味するもので、陸上交通とも交わる交通の要衝であることを示しています。そして、巨視的に見ると、この東京低地は関東の内陸部と海とを結ぶ要衝でもあるのです。近世都市江戸形成の下地は、古代から中世に用意されてきたのです。まさに「江戸は一日にしてならず」ということです。

【記録】文：広報部会・国定美津子
写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2011/7/15)

都営交通100周年記念特別展「東京の交通100年博～都電・バス・地下鉄の“いま・むかし”～」

7月15日(金)14時から江戸博1階映像ホールでの我妻直美学芸員による「見どころ解説」と企画展示室に移動しての観覧会が行なわれました。

本年創業100周年を迎える東京都交通局の歴史は、明治44(1911)年8月1日、東京市が電気局を開局して路面電車事業と電気供給事業を開始したときに始まりました。明治15(1882)年、東京馬車鉄道によって、まず新橋―日本橋間に馬車鉄道が開業。その後日本橋から上野経由、浅草まで路線は延長。しかし、明治23(1890)年4月、上野公園で開かれた第3回内国勧業博覧会でスプレーグ式電車が展示され、日本に電車が広まる契機となりました。明治30年代になると、東京馬車鉄道でも電車を運転する準備を進め社名も「東京電車鉄道株式会社」に改め、明治36(1903)年8月22日品川―新橋間で運転を開始、翌年3月には全路線電車に切り替わりました。この当時東京市内には鉄道会社が3社ありましたが、明治39(1906)年に一本化され東京鉄道株式会社を設立するも、東京市内の電車は公共交通機関であり、東京市が運営すべきという考えから明治44(1911)年東京鉄道は市営となり、東京市電気局としてスタートしました。これが「都営交通」の始まりです。

入口近くの懐かしの都電系統板などの展示は鉄道ファンでなくてもうれしくなりました。市電の実物大の体験コーナーもお勧めです。当江戸博・竹内館長の通学定期券もインフレのすごさの証拠品としてぜひ見てほしい展示品です。

大正12(1923)年の関東大震災で多くの路線や橋が壊れ、電車は約800両が焼失しました。これを境として、バスや私鉄の方に利用客が流れ、市電の利用者数は減少しました。東京市では明治の終わりごろから乗合バスの事業は検討されていましたが、関東大震災を契機に本格的な事業が始まりました。大正13(1924)年巣鴨―東京駅、中渋谷―東京駅で運行を開始しました。

地下鉄建設の計画は明治末期からありましたが、資金不足などで実現は遅れました。東京の地下鉄第1号は昭和2(1927)年の東京地下鉄道による銀座線（浅草―上野間）です。その後、地下鉄事業の統合などの曲折を経て、モータリゼーションによる都電の廃止と対照的に営団・都営地下鉄の開業が進み、現在に至ります。

記憶に残る懐かしい乗り物の写真が、またその当時の風景が、貴重な展示物とともにパネルとしてちりばめられていて、年配の方々には郷愁を、若い方々には知らなかった乗り物の歴史を十二分に伝えてくれる特別展だと思います。

チケットの半券が必要ですが、屋外展示場には、函館に譲渡され今は冬の風物詩になっているササラ電車が、そしてなつかしい元都電2000型の701号が映画「三丁目の夕日」で使われたセットに囲まれて待機しています。

【取材】文・写真：広報部会・松田悠美子

江戸博クリップ

「外で思ったこと」

学芸員　河村三枝子

マリアノ・フォルチュニィという服飾デザイナーをご存知ですか。名前を聞いて男？女？……さて、写真を見るとひげ面の男でした。私が東京都庭園美術館に異動になったとき、最初に担当した展覧会が「ポワレとフォルチュニィ―20世紀モードを変えた男たち」展でした。フォルチュニィは20世紀初頭にフランスやイタリアで活躍し、画家、舞台照明家としてもセンスの良さを発揮した人物です。古代ギリシャの衣装から着想を得て、絹地に細かいプリーツ加工を施した直線的なシルエットのドレスが代表作です。当時、ドレスは裾(すそ)を大きく膨らませていた時代ですから、これはとても斬新なものでした。直線的なシルエットは日本の着物にも通じるものがあります。フォルチュニィは日本の染色に使う染型もたくさん所有していましたし、着物の襟(えり)の形を取り入れたコートもデザインしています。日本人にはいささか違和感のあるデザインでしたが、日本に対する強いまなざしが伝わってくる作品でした。このころ、浮世絵が印象派の画家たちに大きな影響を与えたことはよく知られていますが、服飾の世界でも日本は「新しさ」を感じさせるエッセンスだったようです。

中にいると気付かないことも、外から見てみることで新しい発見があるとはよく言いますが、長く江戸博にいた私にとっては新鮮な驚きと発見で、とても楽しい経験でした。そして、もう一つ。他館に出てつくづく思ったことは、1,600人の会員を率いる江戸博友の会の、自主、独立した運営は、本当に賞賛に値するということでした。6年2ヶ月ぶりに江戸博に戻ってきました。またどうぞよろしくお願いいたします。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や専門研究員、事務職など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会（2011/6/12）

「再訪 江戸四宿を歩く―千住宿」

昨年７月に実施された品川宿に続いて、「江戸四宿」再訪の第２弾、千住宿を訪ねました。

曇り空のなか 180 名の参加者が 15 班に分かれて北千住駅前広場を出発、ほぼ旧日光街道を南下して南千住を目指します。

北千住駅前広場から貫目役所跡

２階にある駅前広場から下に降りると狭い歩道の商店街に入ります。本陣跡の一帯には説明板が設けられているのですが、道が狭いうえによそのグループが見学中だったため、話だけを聞いて次の目的地勝専寺に向かいます。薬医門形式の赤門は戦火を免れ、江戸の面影を今に伝えています。脇に回って境内に入ると千住の「時の鐘」があり、その奥の閻魔堂では扉の小さな窓からのぞくと赤いお閻魔様を拝めます。１月と７月の閻魔詣のご縁日は大いににぎわうとか。

商店街に戻って東の方向に少し行くと、森鴎外住居跡があります。鴎外の父が橘井堂という医院を開業していた家の跡です。次に向かった金蔵寺のご本尊は閻魔大王ですが、この閻魔様は俗に「そば閻魔」と呼ばれ、近所のそば屋のつゆの匂いにつられて夜な夜な若い女の姿に変えてそば屋に通ったという言い伝えがあります。境内には「千住宿遊女供養塔」、天保の大飢饉の「餓死者供養塔」があります。旧日光街道に戻り、問屋場跡（貫目役所跡）に向かいます。多くの人馬の往来があったであろうこの場所も、今は高層の東京芸術センタービル前広場となっており、由来の書かれた説明板と、笠間焼きの陶板で作られた「千住てくてくマップ」などがあります。広場の向かい側にあるヒロセ薬局は千住酒合戦で有名な飛脚宿「中六」のあった場所だそうです。

▲江戸の面影を残す赤門の「勝専寺」

▲東京芸術センター前広場の「千住てくてくマップ」

高札場と一里塚から大橋公園まで

問屋場跡を出てすぐの交差点にある高札場跡、一里塚の石碑を見てから商店街を少し行くと、江戸時代中期の思想家安藤昌益の「自然真営道」についての説明板があります。次は源長寺に向かいます。ここには現在の千住仲町である掃部宿の開拓者、石出掃部亮吉胤のお墓があります。続いて千葉さなが晩年を過ごしたといわれる地の説明板を見てからまた旧日光街道に戻り、墨堤通りを渡ると旧やっちゃ場北詰です。南詰まで、この通りの各店にはかつての問屋の看板が復元されています。途中にある千住宿歴史プチテラスは紙すき問屋・横山家の土蔵で、中をギャラリーとして公開しています。さて、千住大橋手前に大橋公園が見えてきました。ここには『奥の細道』の行程図や「矢立初めの碑」が建っています。ふだんであれば橋のたもとからテラスに降りて堤防の壁に描かれた『奥の細道』の絵や文章、北斎や広重が千住大橋を描いた浮世絵の模写などを見られるのですが、東日本大震災の影響でテラスに降りることはできず、橋を渡りながらの見学となりました。

千住河岸から延命寺まで

橋を渡り、千住河岸の説明板を読んでから素盞雄神社に向かいます。素盞雄大神と飛鳥大神を御祭神とする荒川区でもっとも広い氏子区域を持つ神社です。境内には創建縁起のある「瑞光石」も祭られています。

次は円通寺です。巨大な金ぴかの観音様にはびっくりしますが、ここの見どころは参道左手にある上野寛永寺から移築された黒門や彰義隊士の墓など旧幕府方の戦死者が葬られていることでしょうか。

▲浄閑寺の「新吉原総霊塔」

次に訪れた浄閑寺は新吉原の遊女達が多く葬られたため「三ノ輪の投げ込み寺」と呼ばれ、遊女達を供養するための「新吉原総霊塔」が建立されて今も花や線香が絶えません。

▲修復を待つ延命寺の「首切り地蔵」

いよいよ終盤、吉田松陰、橋本左内などの墓のある小塚原回向院から元は同じ境内にあった延命寺に回ります。ここには刑死者の菩提を弔う「首切り地蔵」と呼ばれる大きな地蔵尊があり、高架を通る電車からもよく見えました。しかし、今回の震災で被害を受けて解体され、台座のみになっていたのには衝撃を受けました。

【記録】文・写真：広報部会・中村貞子

第３回「えど友研究発表会」

車石・車の歴史、浅草寺発祥の伝説、江戸東京の菓子、と多彩なテーマ

第３回の「えど友研究発表会」が８月２日(火)江戸博１階会議室で開催されました。
冒頭，松原会長より「次回は私が発表すると手を挙げていただくことを期待したい」とのあいさつがありました。
今回は３名の会員の発表が順次行われ，それぞれ活発な質問もあり充実した発表会となりました。

１、「車石について ～車の歴史から見た江戸時代～」

落合　大海さん

車石とは牛車の通行を円滑にするため道路に敷かれた石のことで京都三街道（京津、竹田、鳥羽）に敷設されたことが確認されています。

車石には車輪の通るレール状のみぞがあります。昭和59(1984)年ごろにその存在を知り、江戸時代の交通史と江戸時代の社会のあり方がわかるのではないかとの思いで、今年２回調査の旅に出ました。

江戸時代の三都の代表的な車としては江戸は大八車、京都は牛車、大坂はべか車でした。大八車と牛車はスポークが21本、べか車はスポークのない原初的な車でした。明暦の大火［明暦3(1657)年］後江戸で大八車が発明されましたが、全国には普及せず急激な増加はありませんでした。また、大坂のべか車は安永3(1774)年に文献上初見されますが、水の都大坂では船運業者から強い抵抗があり、奉行所はべか車の橋の通行を禁じました。

車石と車道の歴史ですが、車石という記録のある古文書はないのですが、車道という記録は数多くあります。車道は牛車専用の道ですが、そこに必ず車石があったということではありません。現在一般には車石の起源は文化２(1805)年とされており、平成17年８月には「東海道車石敷設200年記念シンポジウム」が京都で開かれています。

２、「浅草寺と岩井堂観音（飯能）」

山崎　進さん

浅草寺縁起によると、推古天皇36(628)年３月18日、兄弟の漁をする網にはからずも１体の観音像がかかりました。郷氏土師中知はこれは聖観音菩薩さまであると知り、寺を起こし礼拝供養に生涯を捧げました。

一方、岩井堂観音縁起には安置されていた尊像は安閑天皇の御代大暴風雨の際崖下に流され行方知れずになったとあります。百年後推古天皇36年隅田川にて三人の漁夫の網にかかり、郷人は返還を求めたがかなわず、改めて尊像を祭ったそうです。

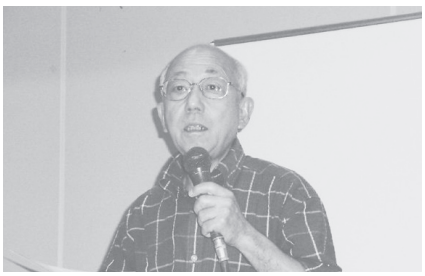
時代を経てこの話を聞いた浅草寺管長清水谷大僧正は末寺善竜院より尊像を奉還しました。昭和8(1933)年９月15日、1,200年ぶりに浅草観音の分身が本家岩井堂に帰る入仏式が行われました。この日浅草観音住持清水谷恭順師は、正午池袋発の電車にて飯能駅に到着。午後２時から開眼入仏式を行いました。1,200年ぶりでご本尊様が帰ってきたというので終日大にぎわいを呈しました。

河川名については入間川は荒川の支流であり、やがて隅田川となり東京湾にいたるのですが、江戸期以前は現在の荒川も入間川と称され、やはり下流では隅田川という名でした。

浅草観音発祥については、岩井堂の他に富山県砥波郡東般若村（俗称観音堂)田中、静岡県阿部郡服織村慈悲尾、奈良県高市郡真菅村字地黄字西浦の人麿神社、愛知県宝飯郡三谷村三谷観音寺にも伝説があります。

３、「江戸東京の菓子を見る」

松本　慶三さん



江戸から明治、現代までの菓子屋番付をそろえてみましたので、見てください。和菓子についての書籍はいろいろありますが、必ずしも正確ではないものも出回っています。出版元が大きなところだからといって、それだけで安心はできません。

会場のみなさんにお配りしたあられは何の味付けでしょうか。豆の見本も回覧していますが､何の豆でしょうか。回答者にはどら焼きをプレゼントします。

原材料の砂糖、大豆他の生産、輸入、用途等の表をお見せします。穀物自給率推移の欧米諸国と日本の比較でも諸外国は軒並みアップないしはダウンしても幅は小さいのに対し、日本のみが大幅にダウンしています。

【記録】文・写真：広報部会・天野哲夫

サークルだより

◎活動概況

◆**江戸東京を巡る会**：6月8日(水)「港区の大名屋敷跡のロマンを追う（高輪編）」と銘打って、品川駅に集合し、松平大隅守下屋敷跡、本多豊後守下屋敷跡、細川越中守中屋敷跡などのほか、東禅寺、正覚寺、泉岳寺、細川邸のシイの樹等をめぐった。参加者37名。

◆**落語と講談を楽しむ会**：6月21日(火)月番の田中文彬さん・寺島玄さんの構成、解説で「志ん生　パート3」。落語「二階ぞめき」(静止画映像)、「泣き塩」(音声テープ)、「おかめ団子」(動画映像）を鑑賞、「安藤鶴夫氏による志ん生秘話」(音声テープ）を聞いた。参加者27名。7月26日(火)武田夏男さんの月番で「寄席の色物芸と寄席囃子（ぱやし）を楽しむ」と題して、Wけんじ、千代若・千代菊、三球・照代、桂子・好江など昭和を代表する漫才、柳家小菊の「粋曲」のＤＶＤを鑑賞、寄席囃子をＣＤで鑑賞、さらに柳亭痴楽の落語「ラブレター」(ＣＤ）を鑑賞した。参加者24名。

◆**藩史研究会**：6月10日(金)大渡眞司さんが「信濃高遠藩」について研究発表を行った。特に江戸時代の保科家二代、鳥居家二代、内藤家八代の3家にわたる歴史の深さに一同感心した。参加者は24名。7月8日(金)後藤幸子さんが過去に発表した金沢藩、大聖寺藩、七日市藩の前田家を全般に整理して研究発表を行った。日本一の大大名加賀前田家の全容に迫る発表だった。参加者18名。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：6月9日(木)、24日(金)、7月14日(木)、29日(金)に例会を開催。参加者は各7、7、7、8名。

◆**神田川を歩き楽しむ会**：6月26日(日)、30日(木)に第18回として、西武新宿線「下落合」駅から佐伯祐三アトリエ記念館を経て落合橋へ出て妙正寺川沿いに歩き、暗渠（きょ）部分（新目白通り）を経て神田川との合流点まで歩いた。途中、薬王院、下落合野鳥の森公園、氷川神社、おとめ山公園、東山藤稲荷神社、切手の博物館、学習院大学などに寄り参拝・見学した。参加者は各32、45名。8月6日(土)猛暑のため歩くのは止め、江戸東京たてもの園でのイベント「下町夕涼み」に参加した。参加者28名。

◆**『江戸名所図会』輪読会**：6月20日(月)土屋献一郎さんの担当で、三田八幡～徂徠先生墓を読み、活発な討論を行った。参加者は18名。7月18日(月）柏木融さんの担当で、魚籃観音堂～萬松山泉岳寺を読み、自由討議を行い、理解を深めた。参加者21名。

❖　❖　❖

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください（ただし、輪読系の2サークルについては現在満員のため欠員が出たときに先着順で参加していただくことになります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

会議・会合日誌

2011／6～2011／7

◆**役員会**

6月14日(火)14時開催。定期総会の総括、江戸東京博物館の人事異動、日本赤十字社へ友の会から東日本大震災義援金の募金を送金したことなどについて報告があった。友の会の基本方針の具体化について話し合った後、各部会からの活動状況の報告があった。出席者14名。

7月12日(火)14時開催。友の会基本方針の具体化のため、新たに目的別チームを発足した。今年度の江戸文化歴史検定の団体受験につき、友の会としては参加しない方針を決定した。事務局の現状の課題と対応について報告の後、各部会から活動状況の報告があった。出席者15名。

◆事業部会

6月2日(木)16時開催。5月の事業の実施報告、6月事業の進行状況及び8月の事業計画を確認した。出席者19名。

7月5日(火)16時開催。6月の事業の実施報告、7月の事業の進行状況および8月の事業計画を確認した。1月セミナーのテーマを決定、これで23年度事業予定の内容がすべて決まった。出席者20名。

◆**広報部会**

6月17日(金)14時開催。『えど友』62号の校正内容の報告があった。『えど友』63号の担当と進行状況の確認をした。今後の作業の基本姿勢、心構えについて議論した。出席者16名。

7月22日(金)14時開催。『えど友』63号の担当と進行状況、お盆時期を反映したスケジュールの確認をした。年度内に、『えど友』の誌面を見直し、また広報部会作業マニュアルを作成することにした。出席者12名。

◆**総務部会**

6月28日(火)13時開催。『えど友』62号の発送業務を行った。今後の活動予定と担当を確認した。出席者25名。

7月26日(火)13時開催。今後の活動予定と担当を確認した。発送業務の作業方法や手順について見直しを検討することにした。出席者21名。

◆**文政町方書上翻刻 プロジェクト**

A、Bグループとも6月2日(木)、16日(木)、7月7日(木)、21日(木)に例会開催。出席者は(A）各9、9、10、9名、(B)各10、9、8、10名。

えど友プラザ
～友の会会員の投稿欄～

「王子の狐の行列」の写真 ～もう一つの入選～

林　義之

昨年(平成22年)の友の会創立10周年記念事業「会員が選ぶ東京新百景」写真展に「王子の狐の行列」の写真を応募したところ、図らずも「銅賞」に入賞しました。自分でもびっくり仰天！　559点もの応募の中から100点が「入選」となり、さらに、10点が「入賞」となりました。入選だけでなく「入賞のお知らせ」をいただいたときは、天にも昇る気持ちでした。今まで、あちこちの写真展に応募はしていたのですが、このように晴れがましい「入賞」というのは初めてです。そして、両国駅のしゃれたコンコースで展示までしていただきました。

■コンパクトデジカメで偶然

賞をいただいた作品は、私の住まい北区・王子で数年前から毎年大晦日の晩に行われる「狐の行列」の行進する様を撮ったものです。転居してきて3年目で、珍しいもの好きの、つまり好奇心の強い私は、区内の名所旧跡や季節の行事をデジカメで撮り歩いていました。この写真も、シャッタースピード、露出も全ておまかせで、ただ、ぶれないようにだけ神経を集中し、構図を考えながら撮りました。ですから、明るさやタイミングはほんとうに偶然にうまく撮れただけなのです。それが「銅賞」入賞と聞いてほんとうにびっくり。

▲「会員が選ぶ東京新百景」入賞作

「王子の狐の行列」の行事は、広重の［名所江戸百景「王子装束ゑの木大晦日の狐火」安政4(1857)年の最晩年の作といわれている］に描かれた浮世絵を再現したもので、王子の町を幻想的な世界に誘ってくれます。大晦日の除夜の鐘が鳴ると、人々が狐のお面を付け、紙の裃(かみしも)で装束を整え、提灯(ちょうちん)の火をかざして王子稲荷神社へ向けて進みます。

これは、昔、王子稲荷の境内に狐が多数すんでいて、毎年大晦日に関八州(奥州東国三十三国という説もある)の仲間が集まり、少し離れた大きな榎の木の下（今の王子装束稲荷＝王子駅前）で身支度を整え、関東総社である王子稲荷に参詣し、村人たちはその狐火で来る年が豊作か否か占った、という伝承に基いています。

■もう一つの入選ー北区観光写真展

入賞した写真を撮る前に、実は、行列の行進が始まるときにもう一枚写真を撮っていました。狐たちが装束に着替えるといわれる装束稲荷の前での写真です。これを地元北区のそれも第一回観光写真展に応募したところ、何と、「入選」してしまいました。またまたびっくり。北区長から賞状と賞品をいただき感激しました。同じ題材で二つの入賞と入選、これは、もしかして、私は写真の才能があるかも、などと一人悦に入っています。

▲もう一つの入選作（大狐）

王子駅前の商店街には、丸い提灯に明かりがともり、微かな風に炎が揺れる、まるで、狐火のようだと評判です。今年の大晦日に王子の町で狐に誘われてタイムスリップしてみませんか。

(「王子の狐の行列」について北区HPや関係者のHPを参考にしました。)

伊豆に生きる江戸の文化 ～鏝絵名人伊豆の長八～

遠藤陽子

機会があって伊豆の松崎に行った。幕末から明治にかけて活躍した漆喰鏝絵(しっくいこて)の名人入江長八の故郷である。西伊豆にある緑の多い落ち着いた町だった。長八はこの松崎で生まれ、12歳で左官職人になり、やがて江戸へ出て狩野派の喜多武清に学び、漆喰を使って鏝で壁面などに絵を描く独自の芸術を完成させた。江戸では日本橋茅場町の不動堂をはじめ浅草観音堂や目黒祐天寺などに多くの作品をつくり、深川でその生涯を閉じた。

松崎は、なまこ壁の屋敷や土蔵があちこちに残り漆喰の町ともいえる。長八が帰郷して描いた漆喰鏝絵は町のさまざまな所に残り、人びとによって大切に守られている。東京でつくられた作品は、関東大震災によってほとんどが焼失したため、一番多くの作品を見ることができるのがこの松崎という。長八美術館では、長八が使った大小さまざまな鏝や、筆で描いたとしか思えないような風景や人物の繊細な鏝絵を遠くから眺めたり、虫メガネでのぞき込んだりして楽しむことができる。この町で特に素晴らしいと思ったのは、現存する寺院や学校、商家に残されて今もそれらの建物を飾っている作品である。長八は松崎の浄感寺に学問を学び、江戸で名をあげてのち、この寺の再建にあたり鏝絵を描きに帰っている。特に天井の八方にらみの龍図はいかにも狩野派といった大作で、この豪快な作品が漆喰と鏝で作られているということに驚く。また、明治時代に町の人びとの手でつくられた岩科学校は、松本の開智学校をほうふつとさせるクラシックなつくりの美しい学校だが、なまこ壁の木造校舎の内部にも長八は天女や千羽鶴などの鏝絵を残している。この学校は明治13(1870)年、今にして3億円近くの資金を集めて建てられ、平成に入って改修、一般公開されている。昭和50(1975)年頃まで実際に学校として使われていたと

いう。子供達の教育のためにこの学校を建て、郷土の誇りである長八の鏝絵でその内部を飾り、その絵が傷もつかず汚れもせず、岩絵具を使ったという美しい色彩がそのまま今に残っているのは感動をさそう。商家に残る長八の作品や豊かさの象徴であるなまこ壁の町並みを見ると古くから港町、養蚕の町として栄えた松崎の人びとの文化水準の高さが思われる。

長八の墓は、故郷の浄感寺と浅草正定寺の２カ所にあるという。現在、東京でその作品が残っているのは、足立区橋戸稲荷、品川区泉岳寺や寄木神社、千葉で成田山新勝寺などである。

色っぽくない色の話

松原　良

「花色木綿」という落語がありますが、みなさんも聞いたことがあると思います。別名「出来心」ともいうこの噺（はなし）は貧乏でなにも盗るものがない八五郎のところに間抜けな泥棒が入るところから始まります。八五郎はこれを滞納している家賃の言い訳にしようと大家さんを呼びます。大家は届けを出すからと盗まれた品物を言わせて書いていくのですが、何も盗られていない八五郎は布団から始まって次から次へと品物を言い立てます。しかも最初の布団で柄などを聞かれて何でも「大家さんとこのと同じ」といい、「裏は」と聞かれると「裏は花色木綿」と繰り返すのです。刀の裏が花色木綿、箪笥（たんす）の裏も花色木綿、お札の裏も花色木綿といった具合で、ここが大いに笑いを誘うところです。

ところで、ここで大活躍の「花色木綿」の「花色」とはどんな色でしょうか。辞書によると「花色は縹色（はなだいろ）のことで、明度が高い薄青色」とあります。さらに調べると薄い藍色、浅葱（あさぎ）と藍の中間くらいの色で、別名は花色、月草色、千草色、露草色などとあります。

色の話が出たところであまり色っぽくない色の話ですが、先日私の参加している雑俳（ざっぱい）の会で冠沓附（かんくつづけ）「色の名前一切」という宿題がありました。雑俳というのは、江戸時代に前句附あたりから生じたさまざまな形式と内容をもつ遊戯的な俳諧文学の総称で、川柳、狂歌、回文、都々逸などみんなその一種ですが、短詩文芸のバイブルと銘打った『雑俳諧作法』(佐藤紫蘭著、葉文館出版、平成11年）には、「多種類をやる会を雑俳の会と呼びます」と書いてあります。ひところテレビで受けた「謎かけ」(前出の書では「三段謎附」と出ています）などもその一種で、今風にいうと「言葉遊び」といってもいいかもしれません。

その雑俳の中で冠沓附というのは、題のものを「七・七体」の頭とお尻に(つまり冠と沓に)割り振って、一つの意味のある句にするものです。ただしルールとして、下七は名詞で終ること、その名詞は三音は不可、頭とお尻で音をダブらせない（例えば「ミドリ」で「ミド…ドリ」や「ミ…ミドリ」などは不可）などがあります。答えの例をあげると「パープル」で「パー子とペーの変なカップル」といった具合です。

こうした題が出たときはまず取り上げるべき色の名前を思い浮かべ、それに合わせて七・七体の句を考えていくことになります。落語好きの私の頭をまずよぎったのは「はないろ」「はなだいろ」でしたが、いい句ができなかったのと仮にできても色の名前としてポピュラーでないので、自分だけの一人よがりになると思い、普通の色で作ることにしました。

句会では実にいろいろの面白い作品が出ましたが、やたらに人様のものを引用するのはまずいので、私の作った句をご紹介しておきましょう。

・紫「村娘見てにぶる切っ先」(ムラ…サキ)
・白「四国札所をめぐるお遍路」(シ…ロ)
・群青「軍備万全さすが江戸城」(グン…ジョウ)

とできてみれば、つまらないものですが、何もないところから考えて作るのは結構大変です。雑俳を通じて江戸時代に思いをはせるのも良し、時にはこんなくだらない？ことに頭を使ってみてはいかがでしょうか。

工場をたずねる

野坂紘子

５月の終り頃、英会話の仲間の招待で、工場見学をしてきた。相客は女性４人、場所は墨田、ドリンク剤などの入っている茶色の小ビンを１日に73万本作っている。平井駅にて待ち合わせ、平井にはなんと50年ぶりくらい。私が通っていた高校は工場街にあり学校の前には目黄不動、校舎のわきには荒川がゆうゆうと流れている。OKUBO GLASSは駅の反対側で車で10分。工場に着くとすぐお部屋でスライドを使ったレクチャー。60歳過ぎて新入社員の気分。用意された白衣、キャップ、耳せん、軍手をつけ、そしてヘルメット！　勇ましい気分で後につづく。炉のまわり、コンベアーのすぐ横の鉄のはしごを登り降り、駆け巡る。炉は1,500度、行儀よく並んで出来上っていく小ビンは750度。先般の地震の時には、それがビュンビュンと飛んできたり、炉を停めるわけにはいかない、火事は出せないで、ずいぶんと怖い思いをなさったそう。出来た小ビンはゆっくりと冷やされ、厳重な検査をして出荷され、われわれの手元にくるわけです。よく見るとビンの形、重さ、口元のなめらかさに日本人のものづくりのていねいさ、細やかさが表われているような気がします。

ガラスの歴史は安土桃山時代にオランダから薬などを入れる物として登場。江戸後期には国産のビンも登場するが、一般化したのは明治中期以後とのことです。ビードロ、ギヤマン、貴重で高価な物が、日本人の器用な手で安価で心地よい製品へと大衆化されていく。この小さなビンの中にも、昔から今につながる何百年かの生の歴史がある、面白いものだなと思います。

牡鹿半島あたりで数mずれ、日々放射能汚染が騒がれている昨今ですが、華の江戸東京の住人としては、いろいろなものを見、聞き、触れ、前に進みたいですね。

落語で

江戸散歩…㉒

［首提灯］

増上寺山内（芝公園）の宝珠院

首提灯

芝山内で、田舎侍に道を聞かれた八五郎、酔った勢いでさんざん毒づきます。怒った侍は、八五郎の首をはねてしまうのですが、あまりにもスパッときれいに切ったため、切られた当人が気付かず、ほろ酔い機嫌で歩いて行くと何度も首がずれてきます。その度に首の位置を直しながら行くと、火事で人通りが多くなり、ぶつかったり押されたりして首が落ちそうになります。仕方なく、自分の首を提灯のようにひょいと差し上げ、「はい、ごめん。はい、ごめん」というところでさげになるのが「首提灯（くびちょうちん）」という噺（はなし）です。

落語には現実には絶対にあり得ないことが平気でまかり通ることがよくあります。「抱かれているのは確かに俺だけど、抱いてる俺はいったい誰だろう」という「粗忽長屋」などがその例で、この「首提灯」も同様です。「そんな馬鹿なことはあり得ない」と思わずに、こういう噺に乗っていける想像力が聞き手に、そしてそう思わせる技量が落語家になければならないのです。このあたりが落語の醍醐味（だいごみ）の一つと言ってもいいでしょう。

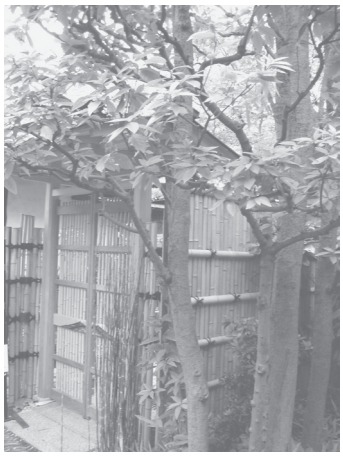
八五郎が首を切られたまま歩き続けた道はいざ知らず、今回は、増上寺といま芝公園という「公園」になっているところはみな「芝山内」とみて、ほぼその全部を歩いてみます。

▲落語『首提灯』の立て札（左）

落語の立て札と茶室・貞恭庵

出発は大門からとします。ここから増上寺の三解脱門を前に見て右側を歩きましょう。と、道端に一つの立て札があります。タイトルは落語『首提灯』。芝山内が落語『首提灯』の舞台と書いてあり、今日のコースのお墨付きです。

立て札を読んだら、信号を渡って、元和8(1622)年建立の国の重要文化財・三解脱門から浄土宗大本山・増上寺へ入ります。まずご本堂にお参りし、隣の安国殿で黒本尊に、というのが一般的ですが、本堂のあとその後ろ側にある茶室・貞恭庵を見ることをおすすめします。貞恭庵は皇女和宮ゆかりの茶室で、昭和55(1980)年に移築・改修されたものです。その際、和宮の戒名から貞恭庵と名付けられました。小さいながら風情のある茶室です。


▲増上寺本堂裏手の貞恭庵

すぐ隣には圓光大師堂もあり、安国殿の後ろを通って徳川家墓所にも行けます。この墓所には6人の将軍とその正室、側室、子女多数が埋葬されています。通常は特別日のみの公開ですが、今年はNHK大河ドラマ「江」もあってか、11月末まで公開されています（参拝料500円）。増上寺はこのくらいにして、西向観音のところから出ます。

東京タワー、もみじ谷、丸山古墳…

ここから右へ進み日比谷通りに出て左折、東京プリンスホテルの前を行きます。道なりに行って、関東大震災や戦災をのがれた二天門、御成門を見ることができます。御成門のそばの信号を渡って左の公園の中へ入ります。ここも芝公園。公園の出口・交番の脇の信号を渡り、右へ行くと東京タワーです。スカイツリーに負けず観光タワーとして残る東京タワーですが、いま3階で「江」展を開催中、NHKのPRめいたものですが、休憩がてらのぞいてみるのも一興です（無料、12月25日まで）。東京タワーを出てすぐ右の公園に進みます。ここも芝公園で「もみじ谷」といわれる所で、もみじの滝もあり、川の流れも見られる静寂な公園です。都会の真ん中にこんなところが、と感銘を受けました。

▲芝公園・もみじ谷

この公園を出ると右手に豆腐懐石の「うかい」があり、左手の公園を抜けて坂を下り、信号を渡ると宝珠院で、弁天池などもあって、この一帯も芝公園です。公園を進むと再び日比谷通りに出ます。これを左折して少し行くと、また芝公園でその中央に丸山貝塚の説明板があります。そしてその先の丘をあがって行くと、東京都指定史跡・芝丸山古墳の説明板と石柱があり、そばには丸山随身稲荷という小さな神社があります。さらに上にあがると、伊能忠敬測量偉功表という碑を見ることができます。ここが丸山古墳の頂上で、これを下りると隣は芝東照宮です。芝東照宮は元和3(1617)年の創建、境内に都指定天然記念物の大イチョウがあり、真新しい板に「お江の御子三代将軍徳川家光お手植え」とあります。

東照宮を出て左に行くと某ホテルの敷地内旧台徳門霊廟惣門（秀忠の霊廟にあったもの）を見ることができます。そして三解脱門に戻り、信号を渡って日比谷通りの東側にある芝公園で万延元年遣米施設記念碑、ペルリ提督像を見て、港区役所前に復元された松原を見れば、芝公園のほぼ全部を歩いたことになります。それにしても自分の首を切られたのに気付かないとは…。

【取材】歩いた人（文・写真・イラスト）：
広報部会・松原良

催事案内

古文書講座

第２期を９月から開講

古文書講座の今年度第２期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内します。

◆入門編

- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教／近世の門跡寺院を中核とした朝廷史・仏教史・文化史を研究)
- 開催日：9/7(水)、10/5(水)、11/2(水)

◆初級編

- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻／幕府職制や幕藩関係、特に将軍姫君の婚礼や付人役人などを研究)
- 開催日：9/21(水)、10/19(水)、11/16(水)

◆中級編

- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻／近世政治史、主として近世朝幕関係、近世公家社会を研究)
- 開催日：9/17(土)、10/15(土)、11/19(土)

- 時間：A 講座は 10 時 30 分～12 時 30 分、P 講座は 14 時～16 時
- 会場：各講座とも江戸博 1 階会議室または学習室 1、2
- 定員：各講座とも 80 名(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全 3 回 1,500 円(初回一括払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展

「世界遺産ヴェネツィア展 ～魅惑の芸術 – 千年の都～」

◆ヴェネツィアは 697 年の共和国成立から 1797 年のナポレオン侵攻までの約 1,000 年の間に、建国・絶頂・終焉(えん)という数奇な運命をたどった都市です。「自由と独立」を貫き、強大な海軍力と交易による富を蓄えた水の都は、その美しさから「アドリア海の女王」ともたたえられました。今回の特別展では、歴史的街並みを今なお残し、世界遺産にも登録されているヴェネツィアの華やかな歴史と芸術が、日本初公開作品を含めた約 140 件により紹介されます。担当の粟屋朋子学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。なお、今回は江戸博の夜間開館復活もあり、従来どおり友の会のために閉館時間を延長していただくことにしました(見どころ解説 17 時～ 17 時 30 分、以後 19 時まで展示室で観覧)。

- 開催日：9 月 30 日(金)17 時～ 19 時
- 申込締切：9 月 19 日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階学習室 1、2 ／企画展示室
- 定員：100 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 700 円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第 109 回「江戸歌舞伎の事件史」

講師　赤坂治績さん（歌舞伎・江戸文化研究家）

◆江戸時代、歌舞伎で起きた事件をたどることで、歌舞伎はなぜ世界に誇る演劇に成り得たのかを明らかにします。欧米の演劇も歌舞伎の真似をしています。歌舞伎が世界の演劇をリードしているのです。先人たちの血のにじむような苦労があって、歌舞伎は高度な演劇になりました。徳川幕府は歌舞伎を敵視して弾圧を繰り返しましたが、歌舞伎はさまざまな方策を編み出してそれをくぐり抜け、高みに到達したのです。そうした観点から江戸歌舞伎の事件史をお話しいただきます。

○講師略歴：あかさか・ちせき

昭和 19(1944)年、山梨県生まれ。劇団前進座、演劇出版社勤務を経て、フリーの演劇評論家・江戸文化研究家。新聞・雑誌に執筆のほか、多数の文化講座・生涯学習講座の講師も務める。著書に、『広重の富士』『江戸の歌舞伎スキャンダル』『江戸っ子と助六』『知らざあ言って聞かせやしょう』など多数。

- 開催日時：9 月 24 日(土)14 時～ 15 時 30 分
- 申込締切：9 月 15 日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】末永俊幸(事業部会)

第 110 回「江戸の遊興」

講師　安藤優一郎さん（文学博士・歴史家）

◆天下泰平の江戸の町では、芝居、相撲、寄席、見世物、花見、富くじ等がどこかで行われていました。八百八町には刺激的な娯楽空間が多く、江戸っ子たちが遊びに費やした金が、江戸に大きな経済効果をもたらしました。このように経済を動かしたのは庶民であることを実証しながら、庶民の遊興についてお話しいただきます。

○講師略歴：あんどう・ゆういちろう

昭和 40(1965)年、千葉県生まれ。早稲田大学教育学部卒業、同大学大学院文学研究科修了。文学博士(早稲田大学)。歴史家。江戸をテーマとする執筆や講演活動を展開。東京理科大学生涯学習センター、JR 東日本・大人の休日倶楽部「趣味の会」、NHK 文化センター、朝日カルチャーセンター、読売・日本テレビ文化センターなどの講師を務める。著書は『江戸城・大奥の秘密』『大名屋敷の謎』など多数。

- 開催日時：10 月 22 日(土)14 時～ 15 時 30 分
- 申込締切：10 月 13 日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】藤村武雄(事業部会)

見学会

「再訪　江戸四宿を歩く―板橋宿」

◆この企画は江戸時代四宿といわれた品川・千住・板橋・内藤新宿のうち、3カ所目にあたる板橋宿を探訪します。今回は徳川十四代家茂将軍の正室皇女和宮が降嫁された道と加賀前田家下屋敷などを探訪します。当時の宿場を感じていただければ幸いです。所要時間は約3時間半で解散場所はJR「板橋」駅・都営三田線「新板橋」駅近くの予定です。

- 開催日：9月25日(日)12時45分集合
  集まり次第、時間前でも出発します。
- 集合場所：JR「板橋」駅東口広場
- 申込締切：9月15日(木)必着
- 定員：150名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員・同伴者500円(当日払い)

【企画担当責任者】代田照彦・西村英夫(事業部会)

「富岡製糸場および周辺見学」(バスツアー)

◆今回は、一昨年から希望の多かった「富岡製糸場および周辺」のバスツアーです。日本の基幹産業の一翼をになっていた富岡製糸場を見学します。また、城下町小幡(おばた)では武家屋敷、雄川堰、大名庭園等を、ゆっくり2時間かけて散策します。昨年は全員で食事ができませんでしたが、今回は名物下仁田ねぎを使った食事がみんなでとれるようにしました。江戸・明治の歴史をじっくり学びたいと企画したものです。帰着は江戸博に18時ごろの予定です。

- 開催日：10月16日(日)7時30分集合、8時出発
- 集合場所：江戸博北側入口　レストラン前
- 申込締切：9月15日(木)必着
- 定員：90名(バス2台)　同伴者1名可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申込多数の場合は抽選
- 参加費：会員6,000円(昼食代1,680円込み)、同伴者6,500円(同)。参加費は前納(参加申込者に振込先と期限を通知します)。

【企画担当責任者】藤村武雄・西村英夫(事業部会)

会員優待のお知らせ

会期残りわずか、お見逃しなく！

●特別展

都営交通100周年記念特別展「東京の交通100年博 ～都電・バス・地下鉄の“いま・むかし”～」

会　期　2011年7月14日(木)～9月10日(土)
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ。

次回予告

●特別展

「世界遺産ヴェネツィア展 ～魅惑の芸術 - 千年の都～」

会　期　2011年9月23日(金・祝)～12月11日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし10月10日は開館
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、大・専門生890円
＊小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ。

企画展のご案内

●企画展　好評開催中！

「市民からのおくりもの2011 ～平成22年度収集　新収蔵品から」

会　期　2011年8月9日(火)～9月25日(日)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

次回予告

●企画展

「日光東照宮と将軍社参」展

会　期　2011年10月8日(土)～11月23日(水・祝)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

お申込方法

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく！**

◆**普通はがき**に、①催事名（略名可）・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、郵便番号、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。

◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第63号
平成23年9月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、内匠屋京子、中村貞子、原盛年、佐藤美代子、国定美津子、天野哲夫、笹田晶子、吉森貴子、宮川勉、平林美幸
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910